

平成 29 年度入試 英語外部検定利用状況

【推薦・AO 編】英語外部検定 利用大学が大幅に増加！

8 割以上が英検準 2～2 級レベルを求める

旺文社 教育情報センター 28 年 11 月 10 日

大学入試の英語科目に代わる試験として注目を浴びている「英語外部検定」。今回は【推薦・AO 編】として、本年度（平成 29 年度入試）の推薦・AO での外部検定の利用状況を調査した。昨年度調査と比較しながら本年度の傾向について見てみよう。

本年度の外部検定の入試利用大学数は 314 大学。全 764 大学のうち 41%が利用し、昨年度比で 5 ポイントのアップとなっている。その内訳は国立 34 大学（前年 23 大学）、公立 21 大学（前年 19 大学）、私立 259 大学（前年 229 大学）となっており、いずれも昨年度と比較して増加している。

●本年度から外部検定を推薦・AO に取り入れた主な大学

国立大

東北大<全学部>、茨城大<教育>、筑波大<医>、宇都宮大<国際>、横浜国立大<経済、経営>、名古屋工業大<工>、大阪大<文、人間科学、外国語、法など>、大阪教育大<教育>、神戸大<国際人間科学>、高知大<土佐さきがけプログラム>、九州工業大<全学部>、鹿児島大<法文、教育、医、歯、工など>。

公立大

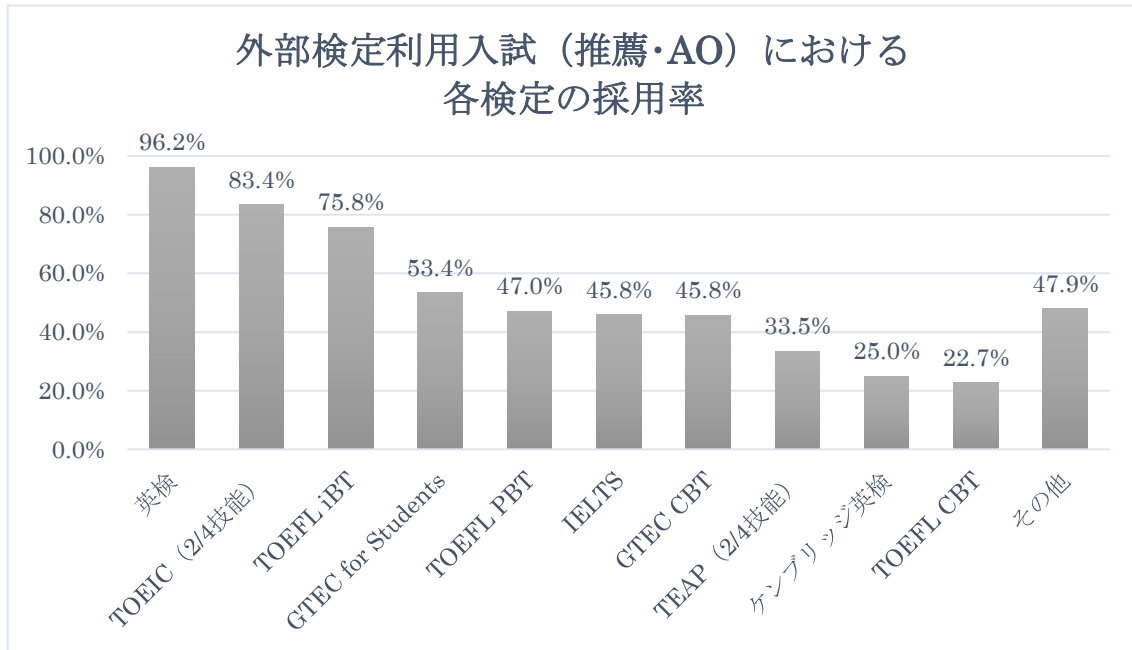
前橋工科大<工>、静岡文化芸術大<文化政策>、大阪府立大<工学域>。

私立大

文教大<文、情報、国際>、麻布大<獣医>、国土館大<全学部>、東京農業大<農、応用生物科学、生命科学など>、早稲田大<人間科学、国際教養、政治経済、社会科学>、大阪工業大<情報科学、知的財産>、神戸女子大<全学部>など。

国立大については国大協が推薦・AO などの募集枠を拡大する方針を打ち出している。その場合、外部検定を利用する大学も増えてくると考えられる。私立大は一般入試では比較的上位の大学から外部検定の導入がスタートしたのに対し、推薦・AO ではすでにさまざまな難易レベルの大学で利用されている。本年度の新規利用も幅広い大学で見られる。大学が受験生に求める能力の中でも、発信力を含めた英語力が重視されてきている今、外部検定利用入試の増加傾向は当面続くと思われる。

●採用率を大きく伸ばした「TEAP」



※各大学にて外部検定を利用している入試方式を 100 とし、それぞれの検定が採用されている割合を算出。
 ※原則、学科単位で集計。1つの学科で複数の入試方式がある場合、外部検定の利用内容が同じなら「1」、異なるなら別々に計上。
 ※各検定の採用については募集要項に記載されている検定を全て計上。「それに準ずる検定でも出願可」のような記載の場合は、上記全ての検定が採用されているとしてカウント。募集要項の文面から記載検定以外が有効と読み取れない場合には採用としていない。

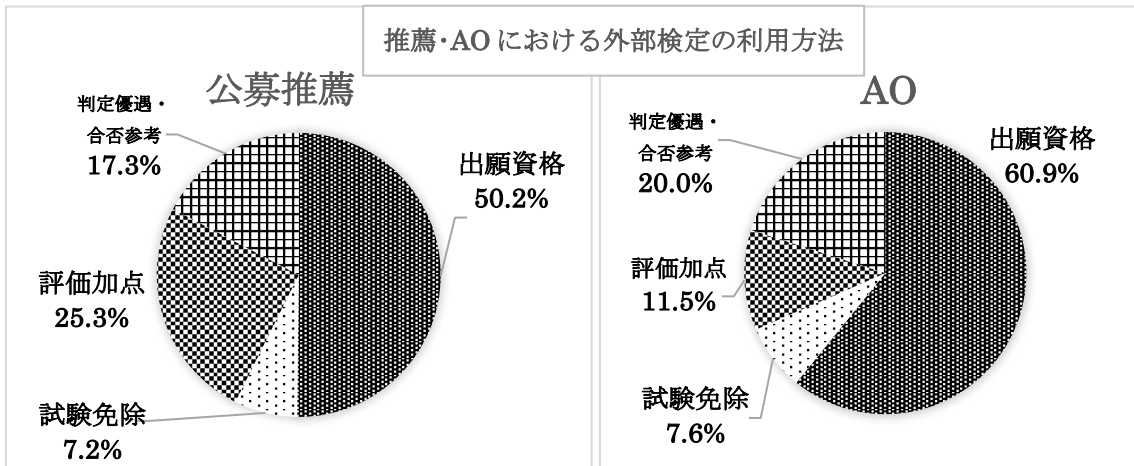
上のグラフは、29年度の推薦・AOで外部検定を利用する314大学における各外部検定の採用率を表したもの。昨年度と比較して、すでに大きなシェアを占めている英語3大テスト「英検」、「TOEIC」、「TOEFL」に変動はないが、注目はそれ以外の外部検定の伸び率だ。特に日本の大学受験での利用を目的に作られた「TEAP」に関しては、昨年度から18ポイントアップし33.5%となった。これは全外部検定の中でも最大の伸び率となる。大学入試専用の試験としての強みを生かして、幅広い大学で採用率を伸ばしている。実施団体の日本英語検定協会の発表によると、27年度に受験者数を前年比30%増と大幅に増やしていることから、今後、それに伴って利用大学数の増加も見込まれる。

不動のトップの「英検」については昨年度同様、学習指導要領に沿った出題内容が日本の教育現場に浸透していることが、採用率の高さの理由だ。また28年度に2級にライティングテスト、4級、5級にスピーキングテストを導入。29年度には準2級、3級にライティングテストを導入するなど、4技能を測定する試験にリニューアルを進めている点も、大学入試でのニーズに合致している。

●各外部検定に求められる利便性

今回調査した外部検定はいずれも、文部科学省が28年3月に「平成27年度英語力評価及び入学者選抜における英語の資格・検定試験の活用促進に関する連絡協議会」の配付資料で「主な英語の資格・検定試験」として掲載したもので、大学に対して急激に知名度を上げることとなった。今回は大学の側から入試での採用率を調べたが、今後はどのくらいの受験者がどの外部検定を入試に利用するか、実際の利用動向も気になるところだ。これからは各外部検定の受験料や試験会場、試験日など受験者にとっての利便性が問われていくだろう。

●公募推薦、AO いずれの利用方法でも最多は「出願資格」。割合は昨年度よりも減少



※それぞれの入試で外部検定を利用している大学（公募推薦=237 大学、AO=159 大学）の中での割合。

※各項目の例【出願資格】「英検 2 級以上を出願資格とする」等。

【試験免除】推薦・AO に学力検査などを課す大学で「英検準 1 級以上の者は英語の学力検査を免除する」、「英検準 2 級を 80 点、2 級を 90 点、準 1 級を 100 点に換算して英語の学力検査を免除する」等。

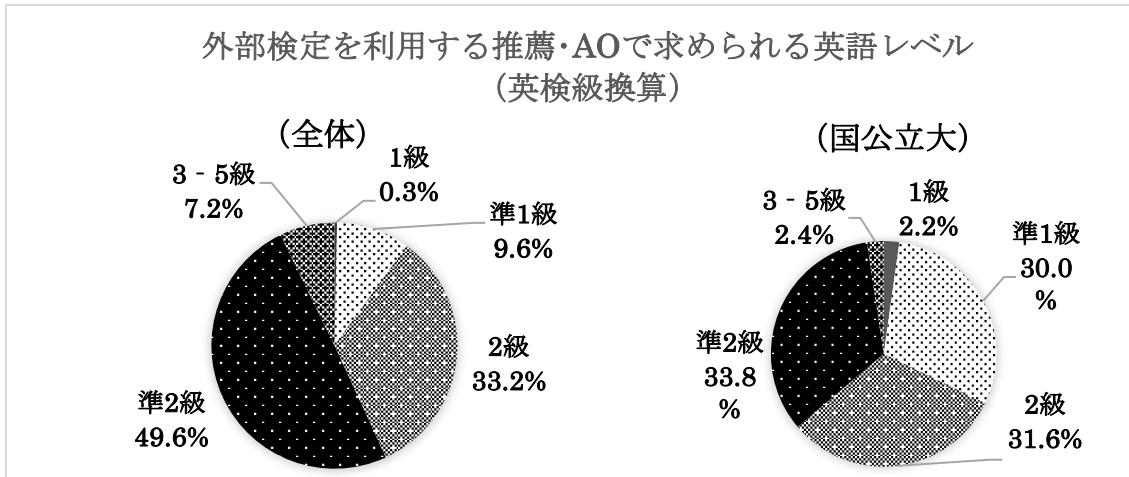
【評価加点】「英検 2 級以上の者は点数化し評価に加点する」等。

【判定優遇・合否参考】「英検 2 級以上の者は合否判定の際に参考とする」等。

外部検定が実際にどのように入試利用されているかを「公募推薦」と「AO」に分けて見ると両者ともに「出願資格」としての利用が最多となっている。これは出願にあたり大学が最低限の英語力レベルを設定、それをクリアした受験生を英語以外の評価項目で選抜する方法だ。公募推薦で多く見られる「評価加点」は、大学の設定する英語レベルに応じて、一定の得点を評価に加点するもの。大学が英語を得意とする受験生獲得のために優遇を行う方式だ。

AO では評定平均を課さない大学が多いため、「出願資格」を設定することで受験生の最低限の英語力を担保している。これに対して、公募推薦では評定平均で最低限の学力は担保し、さらに外部検定で「評価加点」を行うことでより高い英語力を持つ受験生を厚く優遇している。

●国公立大では上位レベル（英検準 1 級レベル）まで求める大学が増加



※募集要項の記載に級・スコアの指定が無いものは除く。

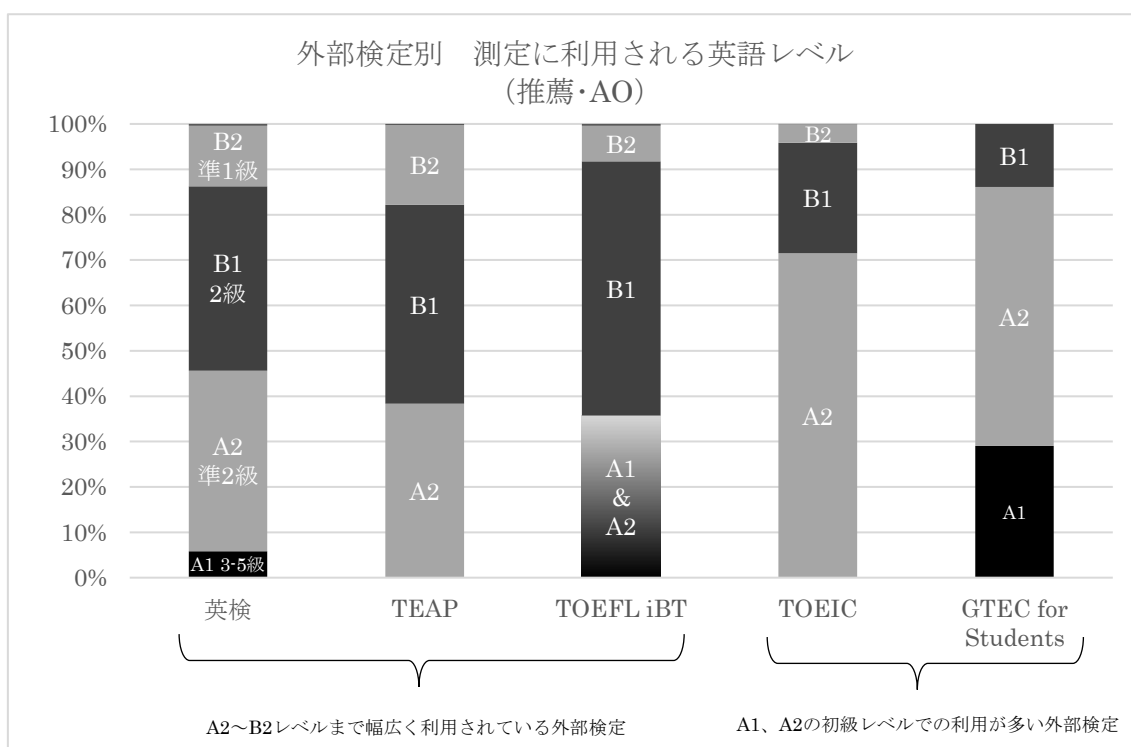
ここでは推薦・AO で大学が受験生に求める英語レベルについて見てみよう。大学が指定する各外部検定のレベルを文部科学省発表の CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠、語学のコミュニケーション能力を示す標準規格）の対照表を使用して統一し、英検級に換算した。

前ページのとおり、外部検定の利用方法はいくつかあるが、そのそれぞれで各大学が指定している英語レベルを集計すると、全体的にこちらのグラフのようになる。

国公立大全体を見ると 8 割以上の推薦・AO で英検準 2～2 級（CEFR A2～B1）レベルが求められている。これは昨年度の調査とほとんど相違ない。文部科学省は英検準 2～2 級程度を高校卒業段階の英語力の目標としており、多くの大学が高校中級～卒業の標準的なレベルを受験生に課していることが分かる。

一方、国公立大に絞って見てみると求められるレベルは上級レベルに移行し、準 1 級レベルが 30%にも上る。昨年度の調査では準 1 級レベルが 16.4%、2 級が 42.7%、準 2 級が 32.8%であったことを見ると、国公立大に限っては推薦・AO で求める英語レベルは昨年度と比較して、上位級にまで広がってきている。

● 推薦・AO で求められるのは A2～B2 レベル。「英検」「TEAP」がバランス良

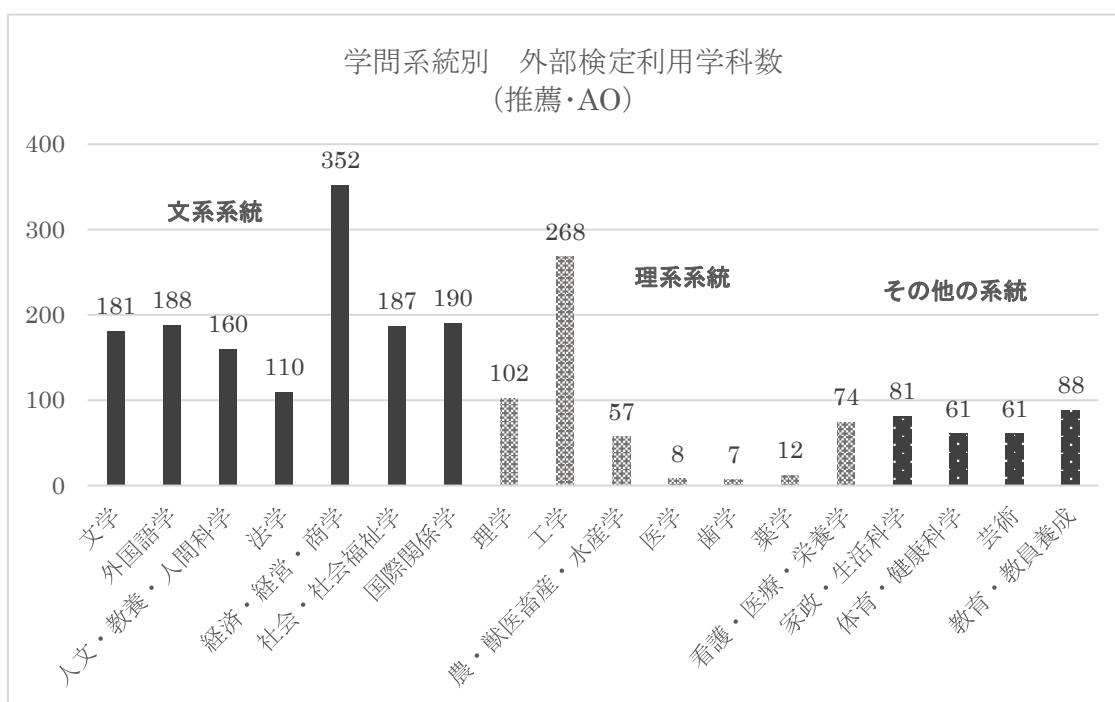


今度は、どの英語レベルを測定するのに、どの外部検定が多く利用されているのかを見てみよう。ここでも文部科学省発表の CEFR 対照表を使い、大学が求める英語レベルを比較した。CEFR は近年、文部科学省の資料でも使用されることが多くなり、英語力を表す指標として地位を確立しつつある。

推薦・AO で受験生に求められる英語レベルは、CEFR で A2～B2（英検準 2 級～準 1 級）が多い。一方、各外部検定にはそれぞれ測定に適したレベル範囲が存在する。初級レベルを求めている大学で利用の多い外部検定もあればその逆もある。

A2、B1、B2 レベルがバランスよく分布しているのが「英検」と「TEAP」だ。英検は級別に試験問題を制作しているため、幅広いレベルの英語力測定が可能だ。その他のテストについては、同一の試験問題で受験者の英語力を測定するため、対象とする英語レベルを絞り込む必要がある。TOEFLiBTは海外の大学留学に必要な英語力測定を目的としているため、B1以上のレベルを求める大学での利用が多い。対してGTEC for Studentsは受験対象が中学生からとなっていることもあり、A1～A2と比較的やさしいレベルでの利用が多く見られる。「TOEIC」では「読む」「聞く」の2技能テストでA2レベルの利用が多い。「TEAP」は日本の大学入試で求められるA2～B2レベルの測定に主眼を置いて開発されたため、採用大学の拡大とともに設定される英語レベルにバランスが取れてきている。

●学問系統別では全ての学科で外部検定利用が増



※学問系統は蜚雪時代4月号臨時増刊における各大学からのアンケート回答に沿って分類。

※外部検定を入試利用している学科を計上、同一学科で複数の外部検定利用入試を実施する場合も「1」と計上。

※学問系統が複数にまたがる場合、両系統に計上(例：国際経営学→「経済・経営・商学」「国際関係学」系統の両方に計上)。

こちらは外部検定を入試利用している学科を学問系統別に分類・集計したもの。その内容を見てみると、突出して学科数が多いのが文系系統では経済・経営・商学系統、理系系統では工学系統となった。各学問系統のバランスは全くといっていいほど昨年度と変わっていない。しかしながら注目すべき点は、全ての学問系統で学科数が増加している点だ。特に伸び率の高い理系系統では昨年度と比べ、工学系統で新たに65学科が外部検定の利用を開始した。理学系統では27学科増、採用数自体はまだ少ないが、農・獣医畜産・水産学系統では30学科増となっている。